

ある故の名にして、即阿波宇美の切まりたるなり、淡海とは湖ならぬ、淡しき海を云なり、さて其れど、淡海とのみ云ては、國名には非るが如く、なれども、本を以てやがて末の名にすること、他にも常に例おほきことなり。

〔諸國名義考〕上 近江

和名抄に、近江知加津阿不三、名義は淡海アワウミなり、この國に大湖あるゆゑに負せたる名なり、續日本紀、元正天皇養老元年九月丁未、天皇行幸美濃國、戊申、行至近江國、觀望淡海とある、淡海は、則大湖をさして云るにて、此國の名義なり、ざるを近つ淡海といへるは、遠つ淡海に對へたる名なり、古事記傳に、遠江に對へて、近つ淡海とはいへども、古も今も、常には阿不美とみの言り、故師は、古事記に、近字あるは、後人の加へたるかと云れたり、云々とあり、さもあるべし、國造本紀には、遠江をば、遠淡海と書れど、近江はたゞ、淡海とのみ書り、藤原不比等公薨去の後に、近江國に封て、諡を字音にて、淡海公と賜ひしにても、いにしへ淡海の字を用られしこと、えらる、されば阿波宇美と唱へしこと、うづなくおもはる、

〔近江國輿地志略建置沿革〕夫以は、近江國舊淡海の國と號す、舊事紀に出たり、衆山東西に峙、中に大水を漉、殆海のごとく水淡し、故に名づく、或は佐々浪の國といふ、樂浪、或は佐々名實の文字につくる、俱に假名文字なり、佐々は小少の名にして、ちいさきの義なり、小き蟹をさ、がにといふ、小さき石をさ、れ石といふ、少しく夜ノのふくるを小夜ノふくるといふ、がごとく、さ、は少しきなり、此湖の浪少しくして、大海の浪のごとくあらざる、そのいひなり、顯昭もさ、浪、さ、ら浪はみ、なちいさき波の名なりと、えるせり、淡海國、佐々奈實の國、みな湖水あるによりての號なり、天智天皇都を大津に遷させたまひ、湖の皇都に近くあるをもつて、改て近江國と號したまふ、湖は、江なり、遠江の國に對して名づけたまふといへり、古事記に、近淡海國、遠淡海國の名を載たり、今按ずるに、元明天皇の後、近淡海の文字を近江國の字にあらためさせたまふなるべし、今訓じてあ